史料室だより No. 88

東洋英和女学院史料室委員会
発　行　2017年5月17日

「村岡花子記念講座」事始

東洋英和女学院大学　学長　**池田　明史**

講座開設　発案の経緯

東洋英和女学院の誇るべき先達、村岡花子女史を主人公とした連続テレビ小説「花子とアン」の放映が始まったのは2014年の春であった。学長就任早々だったので、少しでも学院の歴史に馴染もうと視聴を欠かさずにいたところ、やがてある想いが心中に去来することとなった。中高部と比較すれば遥かに歴史が浅く、また学生の大多数は外部から受験して入学してくるという事情とも相俟って、大学においては建学理念の「敬神奉仕」を如何にして個々の学生諸君の内面に定着させられるのか、という大きな課題を抱えていた。経文のようにただ唱えていれば身に付くというものでは決してないし、現今の学生の性向を考慮すれば、強制的に礼拝に動員して説教を聞かせていれば理解されるといったものでもなかったからである。そのような一方通行的なやり方では、言葉も理念も発すれば発するほど意味や価値が減衰していく。言葉のインフレは、その言葉に表象される本来の価値の希薄化・形骸化をもたらすのである。

求められるのは、「敬神奉仕」というスクールモットーの四文字が、いわば人格化された具体的存在、すなわち「ロールモデル」にほかならない。どこかにそんな材料が転がっていないものか。漠然とそうしたことを潜思していたときに「花子とアン」が始まった。

英和大学生のロールモデルは？

不肖にしてこのドラマを見るまでは、村岡花子なる人物の詳細も知らず、その「腹心の友」柳原白蓮に至っては「戦前のスキャンダラスな上流婦人」程度の認識しかなかった。英和に禄を食むわれわれの間でも「知る人ぞ知る」存在だったのである。それだけに、ドラマに触発されて記録に残る彼女らの歴史的実像に触れ、さまざまな資料からその生き方を検証してみて、学生のロールモデルとして最適ではないかと確信するに至った。当時の英和において時代に屹立する知性を涵養し、その基軸の上に主体的に生き、自他共生の実を挙げた女性たち。とりわけその象徴的存在であった村岡花子については、多様な視角からの接近が可能だという利点もあった。なにしろ、翻訳家・児童文学者・歌人・教育者・編集者・放送作家・社会活動家等々といった多彩な顔を持つ人物である。人間科学・保育こども・国際社会・国際コミュニケーションという四つの学科に包摂される本学の学生の誰にとっても、それぞれがどこかで接点を持てるロールモデルとして位置づけられるはずだと思えた。

以上が、ドラマの放映時に偶々池田が学長職にあったという偶然の所産として、村岡花子の名を冠した自校史と女性学の融合講座を開設できないかとの着想に至った経緯である。

村岡花子記念講座　開設企画セミナー　ちらし

花子特別奨学生制度の発足

さらに人間科学部人間科学科からは、「現代版の花子」育成計画なるものも上申されてきた。上流家庭子女に開かれていた東洋英和女学校のなかでは異例の出自を持つ花子が成業できたのは、寮に起居する給費奨学生制度があったればこそとの認識から、この顰に倣うべく、新たな試みが提案されたのである。すなわち、あれこれの格差が拡がりつつある現代のわが国では、事実上の大学全入時代が到来したと喧伝される一方、経済的理由その他によって大学への進学がまったくオプションにないような状況に置かれている高校生も少なくない。英和が村岡花子を学生のロールモデルとするのであれば、花子がその制度によって掬い上げられたと同様の給費奨学生制度の導入をも射程に入れなければ平仄が合わない、という指摘であった。

関係者の間で「花子プロジェクト」と通称されるようになったこの計画の大枠は、養護施設等から高校に通う女子生徒に対し、その人格や性向、そして何よりも勉学継続への本人の熱意を吟味し、これはと思える者を選抜して学納金その他四年間の大学生活経費につきいわば学院が丸抱えで成業を支援するという構想である。もとより、こうした制度を実現させるには何よりも先立つものを手当てせねばならない。すでに冠講座（「村岡花子記念講座」）開設について相談していた当時の英和後援会の会長に、当該講座と連動させたこの花子特別奨学生制度のアイデアを持ち掛けたところ、即座に満腔の賛意を頂戴し、積極的に役員会の説得に動いていただいた。理事長、院長をはじめ法人側からも全面的なバックアップを取り付けることができ、花子プロジェクトは教学面でも財政的にも十分に担保されることとなった。実は、村岡花子氏は遺言状の中で著作３冊の印税を東洋英和の奨学金に充てるために寄贈する、と明記していた。印税は長年にわたり学院に寄贈されてきたが、今回初めてその真意が活かされることになった。さながら「オール英和」の様相を強めて、晴れて「村岡花子記念講座」とこれに連動した「花子特別奨学生」の新制度が産声を上げたのである。

開設企画セミナー（2016年度）報告

かくして2017年度より現行カリキュラムのフレッシュマンセミナー枠を活用した必修単位としての記念講座の開設に漕ぎ着けた。2019年度以降の新カリキュラムでは、この講座は独立した枠組みの上に立つことになる。いずれにせよ、記念講座の告知をかねて、大学では2016年10月半ばから2017年１月末にかけて５回にわたり、シンポジウムと講演によって構成される開設企画セミナーを実施した。「日本の近代化とキリスト教学校～女子教育の歴史にみる東洋英和～」を共通のテーマに掲げ、六本木校地の大学院大教室で行われたこのセミナーは毎回180名～100名の聴衆を集め、また2016年７月に締結された港区と東洋英和女学院との間の連携協定に基づいて東洋英和が企画し地域に公開した初の連携事業となった。各回のセミナー内容は概略以下の通りである。

第１回（10月15日）では「基督教と学校教育」と題して村上陽一郎前学長（ICU名誉教授・学院評議員）が、また加納孝代活水女子大学長（青山学院女子短期大学名誉教授）が「婦人宣教師と日本の女子教育」の題名でそれぞれ基調講演を行った後、池田も加わって現代日本におけるキリスト教女子高等教育のあり方をめぐってパネルディスカッションが持たれた。パネルを仕切ったのは英和高等部OGで「日経ビジネスアソシエ」誌の泉恵理子編集長である。

第２回（10月29日）の学院史料室嘱託の酒井ふみよ氏による「史料室所蔵資料にみる女学生の日常」は、貴重な写真等の視覚資料をふんだんに駆使した面白い試みとなり、東洋英和女学校の生誕当時から村岡花子の時代を経て、現在につながる英和の足跡が肌身で感じられた。史料室の存在意義が遺憾なく発揮された機会となった。

第３回（11月19日）の講演は、大学国際社会学部の与那覇恵子教授が村岡花子の同時代人である柳原白蓮と片山廣子とについて時代の文脈との関連で解説した「三人の女性から日本の近代を読む」。明治に生まれ大正、昭和を生きたこれら英和先達たちの時代性と近代性とを問う内容であった。

第４回（2017年１月21日）は池田が担当し、「ミッションスクールと帝国海軍」という、いわば埋もれた歴史を掘り起こす視点を提示した。

開設企画セミナー第５回
パネルディスカッション時の村岡恵理氏と池田明史学長

海軍将帥の妻子や係累といった人的ネットワークと英和をはじめとするミッションスクールとの意外な接点を紹介し、その意味を考える試みであった。

そしてセミナー最終の**第５回**（１月28日）は初回と同様にシンポジウム形式となった。「これからの社会とキリスト教学校」をテーマとして、東洋英和女学院の深町正信院長（青山学院名誉院長・和泉短期大学理事長）が「女子教育の社会的・宗教的意義」を語ったのち、「花子とアン」の原案者であり村岡花子の孫にあたる作家の村岡恵理氏が「宣教師から花子へ、そこに学びつつある心の妹たちへ」と題して、花子とその時代が現代に託した遺産についての考察を展開した。さらに、学院宗教部長でもある深井智朗人間科学部教授が、花子の訳した絵本を題材に、「キリスト教学校の作法とエートス」を論じた。これら三人の基調講演を受けて、村岡・深井両氏に池田も加わってパネルディスカッションが行われた。大学OGで日本テレビのアナウンサーとして活躍中の笹崎里菜氏がモデレーターを務めた。

自讃めくが、このセミナーはそれぞれの回が個性的で知的刺激に満ちたものでありつつ、それでいて全体に一貫したメッセージが読み取れる企画となったように思える。新年度より開設される「村岡花子記念講座」は、毎年５回程度を六本木校地で一般公開事業として展開する方向で設計しており、その意味でもセミナーの成功は講座の始動に向けて大きな弾みをつけるものとなった。

最後に、テレビドラマの終了に際して若干の感懐を大学チャペル週報に寄稿していたことを思い出したので、以下に再録して拙文を擱筆する。

「花子とアン」終わる　（大学チャペル週報No.2014-17）

半年間続いたNHKの連続テレビ小説「花子とアン」が今月で大団円を迎える。英和の卒業生がモデルだというので、ともかくお付き合いのつもりで見始めた。（中略）15分の間に起承転結をつけ、盛り上げたところで突然何かが起こってTo Be Continuedとなる現代版の読み継ぎ講談は、なるほど人を逸らさない。時代考証や歴史背景で「そんなはずないじゃん！」というところがないわけではないが、それでも筋書きの波瀾万丈が多少の齟齬など些事と思わせてしまう。このあたり、脚本家に人を得たというべきだろう。

実在の人物の生きた軌跡を大枠にしているとあって、前半では荒唐無稽な色恋沙汰が続いたものの、それらは必ずしも本筋ではあるまい。むしろ、時代に屹立した女性の自我を、そしてその生き方を、現代のわれわれに引き比べて突き付けている部分が色濃く滲み出た後半の展開こそ興趣に富む。とりわけ、戦争の足音が聞こえ始めた時期から、時代の大波にヒロインたちそれぞれがどのように立ち向かったかが丹念に描き分けられていたのには感心した。体制から睨まれながら反戦活動に身を投じる夫君を、文学的反逆心そのままに昂然として支え続ける白蓮と、彼女から「卑怯」と詰られてもギリギリまで「ラジオのおばさん」としての自己の職分を全うしようとし、受忍限度を越えたところで静かに身を引く花子と。

ドラマではいずれも「非国民」としての誹りを免れず、辛酸を嘗めることになる。しかし、この二人の時代への抵抗の姿勢は明らかに異なっていよう。

因みに、欧米の宣教師によって創設されたわが国のミッションスクールにとってこの時代は受難の日々であり、英和もその例に漏れない。東洋「永」和と改名を余儀なくさせられた事実が、その苦渋を物語っている。それは、どこか花子の抵抗と重なって見える。

学長　池田　明史

2017年度 村岡花子講座　予定

今年度の予定は下記の通り。六本木校地本部・大学院棟にて。参加申し込み等詳細は決定次第、生涯学習センターより発表予定です。

①10/14（土）梶原由佳氏（モンゴメリ研究者・トロント公共図書館勤務）
②10/28（土）同上
③11/18（土）深井智朗教授：生きる勇気―花子とバージニア・リー・バートン
④12/ 2（土）島　創平教授：開学の歴史的背景
⑤12/ 9（土）笹島　茂教授：東洋英和の英語教育―異文化間理解能力の育成